

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531151

研究課題名(和文)鑑賞教育指導案の批判的考察と授業モデル(方法論)の構築

研究課題名(英文)Critical observations on the art appreciation teaching guidelines and building a lesson model (methodology)

研究代表者

立原 慶一 (TACHIHARA, Yoshikazu)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10136369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はWebサイト上に公開されている鑑賞教育指導案をくまなく調査・収集し、批判的に考察しようとする。その際、鑑賞体験の四契機が、分析するための視点として設定される。この四契機こそ学習指導要領美術編が近接学問分野にはない、美術教育独自の見識を誇示すべく鑑賞体験の本質に関して洞察した内容であり、それに基づく鑑賞能力観を形づくっている。それぞれの類型における典型的な指導案例を対象として、各契機の有無と作用の様態を究明することによって、各類型に分別されるべき根拠を明確にした。事例ごとに教育的有効性を論評するとともに、契機欠落に起因する問題点及び改良すべき点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to comprehensively survey and collect from websites suggestions for the teaching of art appreciation, and make critical observations on these suggestions. To do so, four opportunities for art appreciation are established as perspectives for analytical purposes. It is these four opportunities that offer insight into the essence of art appreciation by the school art curriculum, with a view to the display of discernment unique to art education and not found in adjacent disciplines, and shape a view of art appreciation ability based on that insight.

By investigating the presence or absence of each opportunity and format of its application, taking as the object typical teaching suggestions of each pattern, the grounds for classification into each pattern were able to be elucidated. As well as commenting on the educational validity of each example, problems originating in lack of opportunity were revealed, as well as points for improvement.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：造形的特徴 美的特性 主題感受 鑑賞能力の序列化 指導のあり方の論理化 実践的な方法論 知性的な方向 感性的な方向

1. 研究開始当初の背景

鑑賞教育といえば、美術史・芸術学をめぐる学的知識の習得であり、はたまたカルチャーセンターの講習内容こそ受講生の年齢差や、関心・意欲・態度の違いをいささかも顧慮することなく、いつでもどこでも通用する鑑賞教育だと、未だに考えられている。そうした趣旨の下に書かれた指導案が実に多く目に付く。それらを見ると、「要領」が鑑賞教育の第一義的なねらいとする、「主題感受（作品の意味を知的ではなく、感性的に理解すること）」はほとんど想定されていない。

こうした状況は「要領」B鑑賞(1)全体の記述そのものにも原因がある。その「ア」は感性主義に基づいて述べられているが、「イ」「ウ」は知的教養主義的な立場から書かれている。「ア」では、作品に対する生徒の感想や印象が大切にされているのに対して、「イ」「ウ」では、学ばれるべき美術史・芸術学の内容が特定されている。「ア」は鑑賞体験のあるべき姿を記しているのに対して、「イ」「ウ」は鑑賞題材を考案・設定し、編成する際の拠り所を示している。「ア」と「イ」「ウ」の趣旨における懸隔は、米国アメリカ・アレナスの「対話型鑑賞教育」と、美術史・芸術学を踏まえた「読解的鑑賞教育」の相克が、我が国の「要領」に象徴的な形で現れたものと見なしえよう。

前者は作品に対する感動や感情という、初発の経験を形容詞句に置き換えることに特徴がある。後者は図像学的な分析や記号論的な解釈など、学術的な読解を主体とするところにメルクマールがある。両者の世界的並びに、日本全国的（「要領」B鑑賞(1)の枠組内）な規模での対立を実践的に止揚するところに、本研究のねらいがある。また、それを際立たせる学術的背景がここに指摘されよう。

2. 研究の目的

中学校学習指導要領美術編、[2・3年生] B鑑賞(1)の「ア」は理論的に無自覚ではあるが、鑑賞体験の本質に関する洞察と、それに基づく鑑賞能力観を打ち出している。これは近接学問分野にはない、美術教育独自の見識と言ってもよい。それに対して「イ」「ウ」は美術史・芸術学が

前提とした、教養主義に依拠している。この立場からの指導案が多く目に付くが、これにのみ従えば生徒の感動する心はしばみ、美意識も育成されまい。本研究はこの趨勢を反省し、「ア」がねらいとする「美的特性の感受」「解釈」「主題感受」「判断」の4契機が達成されるような、授業モデルを構築する。それによって、生徒が主体となれるような鑑賞授業を、促進できる。

3. 研究の方法

本研究はあらゆるメディアに公開されている、鑑賞教育指導案を鑑賞体験の4契機という視点から分析し、能力育成の効果別に類型化する。上位の第1、2類型に属する指導案を、4契機が充足されるべきだとの観点から改善し、この修正案に基づく授業実践を行う。生徒が授業中に書いた、ワークシートの内容を能力別に類型化することによって、教育効果が高いと見なされる題材指導案例を選定する。それらの多数を睨んで、鑑賞授業モデルを帰納的に構築する。本研究は、生徒が主体となれるような鑑賞授業を理想とする。そこでは彼らの作品に対する感動や、感情など初発の経験が大切にされる。

4. 研究成果

現時点で取得できる全指導案を能力育成の効果別に類型化する。それぞれの類型における典型的な指導案例を対象として、鑑賞体験を根本的に規定する4契機の有無と、教育作用の様態を究明することによって、各類型に分類されるべき根拠を明確にする。事例ごとに教育的有効性を論評するとともに、各契機が欠落することで生じる問題点、及び改良すべき事項を明らかにした。

4契機すべてを備えたのが最上位の類型であり、全てを欠落したのが最下位の類型という位置づけを与える。教育効果的に見て上位に属する指導案及びワークシートの形式（質問項目と配列法）を以下の観点から改善する。それは、本来的な鑑賞体験を構成する4契機が充足されるべき、という方向性である。次いで、修正された指導案に基づく教育実践を行う。生徒が各授業中に書いた、ワークシートの内容を鑑賞能力別に類型化し、教育効果の高い題材指導案が

選定される。実効性の高い指導案の多数を睨んで、授業モデルが帰納的に構築される。言い換えれば、授業方法論を確立する。モデルに基づいて効果的な指導案が作成され、生徒主体の教育がなされることになった。

B鑑賞(1)「ア」には、「価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め」と明記されているように、個別的に価値「判断」がなされないと、各自の美意識は培われない。そうした因果関係が日本の教育現場で、方法論的仮説(「要領」の基本的な性格)として公認されている。しかし、価値「判断」が計画された指導案は皆無に近い。また、造形法のあり方はそれだけが知的・概念的に教示されても、実感と遊離した知識にすぎない。それは「ア」並びに「イ」「ウ」が無自覚的に想定している、「解釈」概念が標的とされる。そこには「読解的鑑賞」のあり方における、負の局面が端的に現れてくるのである。

本研究では新たに「解釈」概念を提起する。それは「美的特性⁽¹⁾」や「主題」(作者の心情や意図)の感受との関係を睨んで、表現方法の価値や効果が見極められることで、その本質が正当に認識されるのである。これが本研究で定義する「解釈」概念に他ならない。

かくて感動や感情という、初発の経験を出発点とすることで生きた知識が身に付き、「読解的鑑賞」を基礎づける理知性の、正の局面が「対話型鑑賞」に反映される。「美的体験のもとに知識を学ぶ」、という知見が得られる。その成果によって、ここに両者の対立が実践的に止揚された。とにかく全4契機が組み込まれた指導案を準備することで、鑑賞能力や批評能力、美意識が育成されるのである。

B鑑賞(1)「ア」の趣旨を踏まえて、生徒が授業において感性を主体的に働かせるような、指導法のあり方を目論むためには、授業中、彼らに予想される反応を場面ごとに想定し、もれなく列挙する必要がある。作品の造形的特徴からの「美的特性」の感受、そう感じ取れる根拠を理性の働きによって、造形法のあり方に求める「解釈」、作品の全体的な意味(作者の心情や意図)を感性的に把握する「主題」の感受、各自の価値意識を働かせて批評する「判断(作品の放ツイン

パクト、もしくは表現効果の程度を序列化すること)」の各場面における、発言内容が引き続いて能力別に序列化されなければならない。

指導案及びワークシートの形式が一定量蓄積されることによって、まとまった研究成果として形をなし、美術教育界に向けてここに刊行される。それは言うまでもなく、鑑賞体験を根本的に基礎づける4契機が具わるとともに、「生徒に予想される反応(発言内容)」の項目が、内容的に充実した点に特徴がある。具体的には「美的特性の感受」「解釈」「主題感受」「判断」の各場面における、発言内容が構想され用意周到に、評定基準化されることが条件となる。

美術文化を知的に理解させることに偏り、そのために授業の形態が説明主体となる場合は、他教科のように、授業者がイメージした通りに進展することであろう。しかし、生徒の主体性が発揮されるような授業では事前に構想を描いても、実際にはその通りに展開するとは限らない。

それだけに授業の展開には不測の事態がつきまとう。授業の方法論は一見、マニュアルとも受け取られがちだが、それを身に付けることで自己の実践に自信を持てるとともに、生徒の実感に裏付けられた生きた授業を生み出せるようになる。それと同時に、反って授業がどのようになるのか分からない、スリリングさをも味わえるのである。本研究の結果、彼らはそのような境地にまで到達することができた。

註(1)

学習指導要領B鑑賞(1)の「ア」にある「よさや美しさ……を感じ取り」に相当。ただし要領は「よさ」とは「よさ」であると繰り返すばかりなので、それを定義する必要がある。「よさ」とは語義的には、「均整の採れた」や「まとまった」など、分析美学者ゲーレン・ヘルメレンによれば形態特性に類別化される美的特性である。次に、作品と人や社会とのつながりを自覚し、それをより良いものにしようとすることへの配慮など、作品をめぐる倫理性の謂いでもあろう。かくて「よさ」とはこの二つの意味から成り立っていると考える。「美しさ」とは言うまでもなく、美意識や趣向性などを中身とする、趣味特

性に他ならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

立原慶一、マルク・シャガール作『私と村』の鑑賞における、美的特性の感受と主題感受の調査研究、大学美術教育学会誌『美術教育学研究』、査読有、第46号、2014年、173-180頁。

立原慶一、クロード・モネ作『日本風太鼓橋』の鑑賞(中学1年生)における鑑賞能力の調査研究、宮城教育大学紀要、査読無、第48巻、2014年、149-158頁。

立原慶一、クロード・モネ作『印象・日の出』の鑑賞における美的特性と主題感受の調査研究(中学1年生の場合)、宮城教育大学紀要、査読無、第47巻、2013年、143-150頁。

立原慶一、鑑賞教育における「美的特性感受法」の意義と効果～題材「作品のまなざしを捉えよう 人物をモチーフにした彫刻家舟越 桂を事例として、美術科教育学会誌『美術教育学』、査読有、第34号、2013年、331-346頁。

立原慶一、作品比較法による「ルノワール作『ピアノに寄る娘たち』の鑑賞」(中学1年生の場合)、宮城教育大学紀要、査読無、第46巻、2012年、117-123頁。

立原慶一、ポール・ゴーギャン作『アレアレア』の鑑賞における、美的特性の感受と主題感受 負の抒情をめぐって、芸術文化(東北芸術文化学会誌) 査読有、第17号、2012年、75-87頁。

立原慶一、作品比較法による題材「世界遺産、ミケランジェロの『最後の審判』の鑑賞」(中学2年生の場合)、大学美術教育学会誌、査読有、第44号、2012年、303-310頁。

立原慶一、鑑賞教育指導案の批判的考察 鑑賞体験の四契機を分析の視点として、美術科教育学会誌『美術教育学』、査読有、第32号、2011年、281-297頁。

立原慶一、教養型鑑賞授業の意義と課題、芸術文化(東北芸術文化学会誌) 査読有、第16号、2011年、23-36頁。

立原慶一、中学3年生における鑑賞ワークシ

ートの考察、宮城教育大学紀要、査読無、第45巻、2011年、109-122頁。

[学会発表](計10件)

立原慶一、グスタフ・クリムト作『死と生』の鑑賞(中学3年生)における、美的特性の感受と主題感受の調査研究、第36回美術科教育学会、2014.3.29.於)奈良教育大学

立原慶一、中学校における鑑賞教育の評価と指導のあり方、第65回東北芸術文化学会例会、2014.2.22.於)弘前大学

立原慶一、マルク・シャガール作『私と村』の鑑賞における、美的特性の感受と主題感受の調査研究、第52回大学美術教育学会、2013.10.13.於)京都教育大学

立原慶一、ポール・ゴーギャン作『アレアレア』の鑑賞における、美的特性の感受と主題感受の調査研究、第35回美術科教育学会、2013.3.29.於)島根大学

立原慶一、鑑賞教育における「美的特性感受法」の意義と効果、第51回大学美術教育学会、2012.10.20.於)大分大学

立原慶一、対話型鑑賞の意義と課題、第61回東北芸術文化学会例会、2012.10.19.於)福岡県立ももち文化センター

立原慶一、教養型鑑賞授業の意義と課題、第34回美術科教育学会、2012.3.28.於)新潟大学

立原慶一、大原 螢氏における東北芸術文化の水脈、第59回東北芸術文化学会例会、2011.11.26.於)山形大学

立原慶一、鑑賞指導案の批判的考察と授業モデルの構築、第57回東北芸術文化学会例会、2011.10.23.於)弘前大学

立原慶一、作品比較法による題材「世界遺産、ミケランジェロの『最後の審判』」の鑑賞(中学2年生の場合)、第50回大学美術教育学会、2011.9.25.於)宮城教育大学

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

立原慶一 (TACHIHARA, Yoshikazu)
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10136369

(2) 研究分担者

浅野治志 (ASANO, Haruyuki)
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40143044

虎尾 裕 (TORAO, Yutaka)
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80302256

降籟 隆 (FURIHATA, Takashi)
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：20302284

長瀬達也 (NAGASE, Tastyua)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：30333917

佐藤光輝 (SATOU, Mitsuteru)
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：50333703

(3) 連携研究者

(なし)

研究者番号：